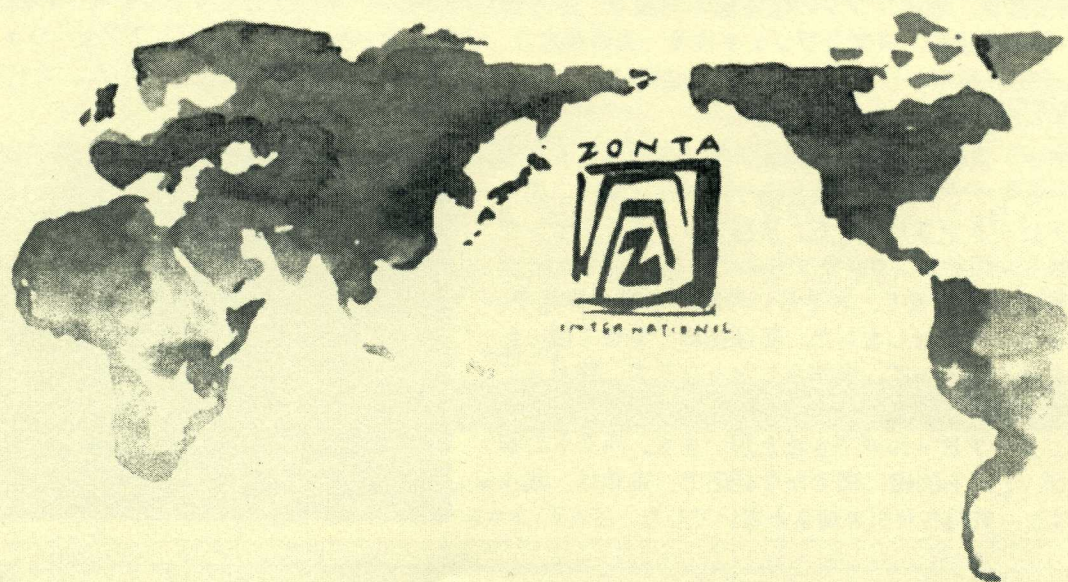




OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱ ゾンタクラブ第44号(2017年9月)



巻頭言

会長 笠置 伸子



無我夢中のうちに一年が終わり2年目に入りました。どの会長も同じ思いだと思いますが、会員一人一人の力が大きく、その力が一つの塊となって、クラブを動かして方向を決めていくのだと思いました。どんなにすばらしいアイデアも会員の皆様の賛同と盛り上がりがないと、形となっていきません。私の様な何の取り柄も持ち合わせていない人間が何とかやってこられたのは一重に会員の皆様の力強い協力のお陰です。

今年度は寄付先を4箇所入れ替えました。それにより新たにゾンタクラブのことを一人でも多くの人に知って頂く機会が出来ると思います。また、唯やみくもに寄付先を決めるのではなく、今回は少しでも子供の施設に支援を行う事が出来ればと決めました。これにより会員が自分の心で子供たちを感じて、ボランティア活動をする事ができると思います。

イベントの収益も少しずつですが、いい方向に向いてきましたが、まだまだこれから努力する余地はたくさんあります。

新入会員の確保はなかなか難しく、努力が実を結ぶまでには至りません。言い訳は沢山できますが、結果のみが評価されるので、引き続き懸命に努力する所存です。

クラブの設立当時からイベントをして寄付をして人員を確保し、ゾンタ知名度を高める事が中心になり活動をしてきました。会長他役員が2年間で交代するのは、いろいろな意味でとても良い期間だと思います。その時の会長、役員の方々の考え方や価値観が反映して、国際ゾンタのテーマに沿って実行していくことにより、進化して時代に合った必要とされるクラブでいることが常に大切だと思います。

ゾンタクラブはボランティア団体なので、その時の時間の余裕が持てた人がそれなりに参加すれば良いと考えて、ここ20数年間やってまいりました。

そして今、余裕ができ会長職2年目に入りました。至らないところばかりですが、もう1年ご協力をお願い致します。

午前の部

佐野 由紀子



第9回エリアミーティングは、2017年5月13日(土)に、ホテル日航奈良にて開催されました。今回のテーマは「女性の権利を擁護するリーダー的組織」ということで、12クラブから162名が、参加いたしました。当クラブからは、牛田、坂本、辻、内藤、中田、中塚、西村、幡山、宮本、芳川、佐野の11名が参加いたしました。あいにくの雨でしたが、朝早くから大勢の参加者がホテルに集まり、6つのストアも開かれました。当クラブからも、ベトナムの子供たちの作品を出品いたしました。好評でかなりの品を販売することができました。

11時からの開会式は、奈良ゾンタの櫻井様の司会で、物故者黙祷のあと、澤井エリアディレクターの開会挨拶、真鍋26地区ガバナーの来賓挨拶、来賓及びゾンタ役員・委員長紹介、祝電披露と進みました。ビジネスセッションは、議長選出、出席者報告、2016年度エリアディレクター活動報告、エリア3エリア費中間報告が行われました。すべてが滞りなく、速やかに行われました。

懇親会では、まず、次回の地区大会開催予定の高松ゾンタ有志による「ピンキーとキラーズの替え歌と踊り」での「高松に来てよね」といったアピールがありました。次回エリアミーティング開催予定の、われら大阪Ⅱゾンタクラブ有志による銭太鼓は、「かわち男ぶし」の音楽に合わせて、おそろいの赤い法被・鉢巻で、華やかな演奏を皆様にお見せしました。私は初めて見せて頂いたのですが、とても迫力があって、素晴らしかったです。終わってからの「大阪でお待ちしております」という横断幕も決まり、来年の開催に向けて、良いアピールができたと思います。ホストの奈良ゾンタクラブは、とても的確に細やかな対応で、来年は、我々も頑張らなくてはと、気持ちが引き締まる思いでした。



午後の部

幡山 玲子



午後のプログラムは講演会から始まった。講師は寮美千子氏。私は今までその存在を知らなかったが、絵本、童話、詩、小説と幅広く活躍されておられる方の方である。演題は、彼女のレジュメによると「詩が開いた心の扉～奈良少年刑務所での試み～」ということで、彼女が9年間続けてこられた奈良少年刑務所での社会性涵養プログラムの講師時代のお話を伺った。

奈良少年刑務所は、5大監獄のうち唯一現存する建物で、近年重要文化財に指定されている。講師は、最初奈良刑務所の建物に興味があり、「奈良矯正展」へ行かれた時に刑務所職員の方と知り合わせ、その後社会性涵養プログラムの講師になってもらえないかとの依頼が来たそうである。当初彼女はどのような罪を犯した子供たちが入所しているかわからないし、どのような授業をすればいいのかかわからずお断りになったそうだが、細水れい子統括官の熱心なお誘いもあってご主人を助手につけて授業されることを承諾されたのである。

社会性涵養プログラムとは情緒を耕す教育である。「当たり前」の感情を当たり前に出せない子供たちが当たり前「感情を表現できるようにする」更生教育である。刑務所の中で他の収容者とコミュニケーションを図れない、他と共感できないなど問題を抱える入所者を選抜して1クラス10人で、絵本を読んだり、朗読劇をやったり、詩を書いたりする授業を行う。その中で彼らは、困った時の助けを求めるやり方や、自己肯定感、仲間意識を育てていくというものである。

はじめは何も書くことがないと言っていた子供も「詩が思いつかない」という詩を書いて、「詩が思いつかないまさかのパート2」を書いて最後には頑固な父親のことを「涙」という詩に書いた。警察に呼ばれたとき警官に子供を一字でたとえたと何かと問われた父が、真っ白な紙に大きく宝と書いた、それを見た作者は、抑えられない何かを感じたと詩に書き記しました。詩を書くことで過去を思い出したのです。やっと心を開きました。

この授業では自分の詩を朗読してクラスの仲間がそれについて感想を述べます。

「くも 空が青いから白をえらんだのです」と書いたA君は朗読後7回忌を迎えるお母さんのことを語りだし、「つらいことがあったら、空を見て。そこに私がいるから」といった母。その母をいつも殴っていた父親から守れなかったと述べる。クラスの子たちが次々と「詩を書いたことがお母さんへの孝行だ」とか、母を知らない子供が「空を見たらお母さんに会えるような気がした」と語りだす。一つの詩が呼水となって仲間の心がつながって行く。

入所者はいじめや虐待、自らの精神的な障害など様々な事情を抱え、感情が鬱屈し爆発して結果的に罪を犯してしまった。その感情を受け止め理解してくれる人がいたなら犯罪者にはならなかっただろうと彼女はおっしゃる。講演会の話で涙することはめったになかったが、寮さんの話を聞いて知らず知らず涙が出てきた。話を聞けなかった皆さんには是非新潮文庫の『空が青いから白を選んだのです 奈良少年刑務所詩集』をお読みになることをお勧めします。

奈良刑務所はこの3月に閉鎖され、他の刑務所と統廃合された。跡地はホテルになるとのこと。このユニークなプログラムが新しい地でも続くことを心から願って報告を終わります。

2018年国際ゾンタ横浜大会の概要について

西村 博子



2月例会(2017.2.9)は、日本で初めて開催される2018年国際大会の概要について、大会委員長の三宅定子様を岡山からお迎えして学びました。

40年にわたるゾンタ歴のお話からはじまり、国際大会の概要から現在の準備状況まで、詳細にわたりお話し下さいました。

すでに国際大会に出席した経験を持つメンバー、横浜での大会が初めての参加というメンバー両方ですが、共に参加への意欲を持つ絶好の機会になりました。

(次第)

1. 26地区大会と国際大会 ゾンタへようこそそのパンフレットから
2. 国際大会の開催地が日本に決定するまでの経緯
3. 開催地のホストとなる地区(日本の全クラブ担当)の債務
4. 国際会長、国際理事会、国際本部、大会委員長と企画会社(米国最大大手)のそれぞれの役割
5. 大会委員会組織とプログラム概要
6. 「横浜大会スポンサーシップ協賛金」「横浜大会開催準備金」の相違

2年に一度の国際大会、毎回日本からは100名ぐらい参加されていますが、今回は日本での開催、クラブ全員の参加が期待されています。国際ゾンタを支える一員として、各クラブは協賛金や準備金に協力するとともに、小委員会での役割を全うしていくことが求められています。

何より国際ゾンタの理解を深めて日々の活動につなげていきたいものです。

世界中のゾンシャンとお会いできるのが楽しみです。

今後は各エリアのミーティングでも継続してお話されていきます。また本日はエリア3のスポンサーシップ委員、大阪Iの上田恵子会員も同席下さいました。ありがとうございました。



2月9日例会



7月13日例会

エリアディレクター澤井早和乃様をお迎えして

笠置 伸子



7月13日木曜日にエリアディレクターをお迎えして第260回例会を行いました。その折に設立当時より斉唱しているゾンタソングは正式ではないが、例会の時に斉唱するのは問題ないと思いますと言われたのでこれからも気にしないでゾンタソングを斉唱いたします。

エリアディレクターの仕事は地区とクラブとの間の橋渡し役で、ガバナーは国際と地区がメールを配信により同時に同じ事を共有したいと考えておりますので、その点、大阪IIゾンタクラブはスムーズに行えているとお褒めの言葉を頂きました。

第10回エリアミーティングのホストクラブは大阪IIゾンタクラブなので、エリアミーティングを行うことでクラブの団結を強くして、他クラブとの交流を持って温かいエリアミーティングにしたいとお話をされました。これからも何度もお越しいただく事と思いますけれど、宜しく願い致します。

エリアディレクター澤井早和乃様ありがとうございました。

阪神大震災が決めた落語家人生 ～自分の道の見つけ方～

福本 敏子

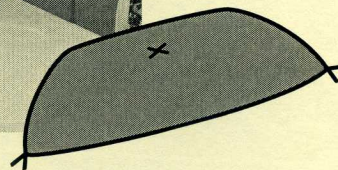
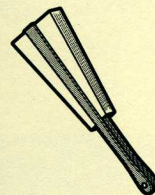
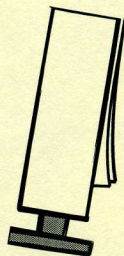


平成 29 年 3 月 26 日 (日) に第 22 回大阪Ⅱ ゾンタクラブ・チャリティイベントとして天保元年から続く老舗料亭『花外楼 北浜本店』にて講演会を開催しました。大阪Ⅰ、京都Ⅰ、京都Ⅱ、大津、神戸、千姫路など遠路はるばる多くのゾンシャンが駆けつけてくださいました。

会長挨拶の後、落語家の桂福丸様が『阪神大震災が決めた落語家人生～自分の道の見つけ方～』と題し講演してくださいました。出囃子「銀のぴらぴら」にのって登場された桂福丸様は 1978 年生まれで大震災当日、灘高校 1 年生でしたが、震災後の悲惨な状況を目のあたりにし、一度きりの人生をいかに生きるべきかという事を考えられ、京都大学法学部卒業後に 4 代目桂福団治に入門されました。入門後は持前のバイタリティーで師匠に仕え、英語落語にも挑戦し、また、寄席以外でも各地で落語会を開催し好評を博しておられます。落語は 400 年前に、ある高僧が法話の前に笑いで檀家の人たちの心を開く方法として考え広められたそうで、人は笑うことにより一瞬にして打ち解けられ、また、笑うことにより免疫力がアップし長寿につながるといわれています。20 秒笑うことは 3 分歩くのと同じ効果があると話されました。講演の後、人と人のつながりの大切さをテーマにした『子はかすがい』を 1 席披露してくださいましたが、何人もの登場人物を見事に演じ分けられ、人情話に会場中、引きこまれ思わず涙ぐんでおられました。

講演会後は花外楼ご自慢の懐石料理を中之島の景色を楽しみながら召し上がっていただきましたが、新しい出会いもあり、心もお腹も一杯の楽しいひと時を過ごしていただく事ができました。

大阪Ⅱ ゾンタクラブは今後も女性の地位向上のためのチャリティイベントを企画してまいりますので、ご協力ご支援をよろしくお願い致します。



春爛漫 (2017年4月9日)

中田 智恵海



春の移動例会、しばし街中を離れて嵐山と保津川下り。幼い頃を思い出してちょっとした遠足気分の6人です。

嵐山は思いのほか混んでいました。それもそのはず、兩岸は櫻さくら桜。薄桃色、濃い紅色、そして真っ白。視界の限り、桜です。あちこちで日本語はもちろん、中国語、英語、ドイツ語、フランス語、どここの国かは分からない言語が飛び交い、多文化共生。ああ世界の京都、そんな中心に今、私は居る、と一人ワクワクして「錦」の暖簾をくぐります。嫺やかな女将に迎えられて昼食は期待を裏切らず、お品の良い器、お味、見た目、香りと全て取り揃ったお料理が次々に運ばれてきて胃袋を充たし、なんとも至福な時間を過ごします。どのお料理が最も美味しかったかと6人は喧嘩囂囂。もうこれで十分、満足と思っておりましたが、更なる至福が保津川で待っていました。

この時期の保津川の水量は多く舟を楽しむ旬の時期ですが、前日の雨のせいで水量は少し多めでさらに急流を楽しめそう、とのこと。わぁーラッキーと独りごちます。川の水は激しく岩に打ち付け渦巻きます。そんなリスキーな流れの中を巧みに舟を操り、ゆったりした流れではゆったりと自然を味わえるように、熟練した中年(?)の船頭さん二人とイケメンの若者一人のスタッフが兩岸にひろがる岩や次々に姿を見せる鳥、植物、動物などライオン岩、オットセイ岩、すみれ、空木、しぎ、かわうそ、と説明が続きます。水しぶきにじっとり湿った衣服もなんのその、自然の中の生き物たちに私たちは圧倒され、これが地球だ!と1時間半の感動が続きます。自然はどうしてこうも心を躍らせるのでしょうか。

一日の旅を終える薄寒い午後6人は名残を惜しみながら最後のお茶をして帰途につきました。真っ青な空と色とりどりの桜、清んだ川と新芽の中にちらほらと咲く花をちりばめる山々、そして賑やかで気心の知れたお仲間。もうこれ以上ない幸せな一日でした。皆さま、ありがとうございました。



死ぬまで元気で! (2017年7月13日)

牛田 三千子



今年度最初の卓話は、ラフィーラ体操の指導をしておられる梶屋知恵先生をお招きし、生涯自立して暮らせる身体のメンテナンス方法のお話を伺いました。

ここ20年～30年のあいだに平均寿命はぐんぐん延び、今や人生90年は当たり前の時代になりました。長寿はもちろんめでたいことなのですが、出来れば最後まで自分のことは自分ででき、周りにはあまり負担をかけず、旅立つときにはころりと、というのは誰しも願うことです。

ただ、そのように理想通りにはいかず、身体の機能の衰えからあちこちに不調を抱え痛みや辛さのなかで長い老後を送る方も多くおられることも事実です。

ではどのように身体のメンテナンスを行なっていけば機能低下を防ぐことができるのか、ということは皆の最大の関心事です。

例えば歩く力を衰えさせないように毎日のウォーキングを日課とされている方がたくさんおられます。万歩計を腰に付け1万歩を目標にしておられるのですが、年齢や身体の状態によっては歩き過ぎになることもあるようです。歩くことによって太ももの前側(大腿四頭筋)は鍛えられますが、逆に膝関節の方はすり減っていきます。



ですからそのバランスが大切ということです。

そのようなお話のあと、実際に皆で身体を動かしてみました。

頭の位置がしっかり背骨の上にあるような正しい姿勢を作るための体操。

両手をまっすぐ伸ばし耳の横にぴったりつける体操。

肩甲骨の可動域を広げる体操。

大腿四頭筋を鍛える体操。

背骨をねじる体操。などなど・・・約30分にわたってご指導いただきました。

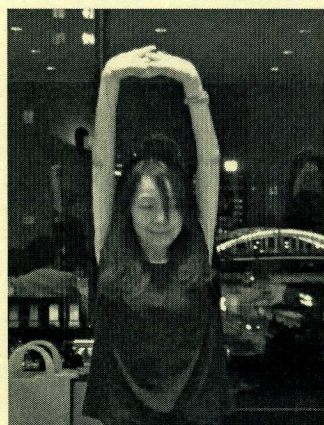
終わった後は身体がポカポカと暖かく、全身に血液が循環しているという実感がありました。

そういえば、家電でも車でも家でもメンテナンスの仕方によって、その耐用年数より長く使えたりその逆のことがあったりするのとは時々経験することです。

人間の身体も同じことでしっかりケアして、なまけさせず使い過ぎず身体の声によく耳を傾け大切に付き合っていけば90年を使いこなせる気がします。

そのほかの大切なこと、例えば食事や精神面の安定なども併せて、出来るだけ健康寿命を伸ばすための努力はしたいと思いました。

美味しいものを美味しくいただき、ゴルフや銭太鼓などの楽しみを失いたくないですから。



大阪Ⅱゾンタクラブの寄付先紹介

大阪水上隣保館

徳光 正子



大阪水上隣保館は、キリスト教の隣人愛の精神に基づき「援助を求める人いるならば、手をさしのべる」を基本理念に児童福祉施設を中心に様々な施設を運営しています。

1931年、牧師をされていた中村遥、八重子夫妻が大阪市港区に水上生活者の子供を預かる「水上子供の家」を開設したのが始まりで、大空襲により施設が全焼したため、大阪府島本町の支援者を頼り現在地に移転し今日に至っています。児童養護施設、特別養護老人ホーム等、現在は15施設を運営する総合福祉施設です。父が昔から中村夫妻の友人だったことからの長いお付き合いです。この度、乳児院の方にご寄付いただくことになったとのこと、大変感謝しておられます。私からも心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2016年度の活動

月	日	曜	例会場所	事業内容	委員会活動その他
2016					
6	9	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	新入会員 中田智恵海さん紹介 エリアミーティング報告 チャリティイベント vol.21 報告 決算報告・予算案	
7	14	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	ニース国際大会報告 納涼会・卓話について	7/2～7/6 第63回国際ゾンタ世界大会(ニース) 笠置会長・宮本会員参加
8	27	土	リーガロイヤルホテル なだ万	納涼会	
9	8	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	卓話「これからの観光 交流企画を考える」 和歌山大学観光学部教授 竹鼻圭子先生	広報委員会 大阪II広報紙 42号発行
10	13	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	卓話「ワインのはなし」 宝塚ワインと文化の会会長 野田一三先生	10/23 奉仕委員会 障がい者施設「きららの木」訪問 銭太鼓・ハンドベルを披露
11	20	日	移動例会	伊勢神宮と松坂牛の会食 「若柳」	
12	8	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	「1年の活動を振り返って」 リーフレット、バッジ、名刺作成	
2017					
1	19	木	ホテルニューオータニ 料亭花外楼	大阪I・II合同例会 卓話「日本絵画を読み解く」 嵯峨美術大学教授 佐々木正子先生	
2	9	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	「2018年国際ゾンタ横浜大会の概要と クラブの責務について」 大会委員長 三宅定子様	
3	9	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	イベントの準備・役割分担 バッジ、リーフレットの配布	広報委員会 大阪II広報紙 43号発行 3/26(日) 11時30分～ チャリティイベント vol.22 「落語家桂福丸氏講演—阪神大震災が決めた落語家 人生」参加者 74名
4	9	日	移動例会	「春の遊覧旅行—保津川下り」	
5	11	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	3月イベント決算報告・委員会活動報告	5/1 エリア3 第9回エリアミーティング奈良 11名参加 銭太鼓を披露し、次年度 AM への招致活動をする



大阪府からの感謝状

我家の愛犬達

中塚 淳子



マロンが我家の一員となったのは、平成20年夏の事でした。それは、平成19年11月に主人を亡くした次の年でした。

突然一人娘が「お母さん、犬を飼ってもいい?」「タローがいるじゃないの?」「もう一匹飼いたいの?」そんな会話から始まりました。当時我家には愛犬タロー（男の子、ゴールデンリトリバー）を飼っておりましたので「えっ、2匹も?」と思ったものです。娘は父を亡くした淋しさをまぎらす為に、今度は小犬を飼って寝起きを共にしたかった様なのです。

私は、「タローちゃんが居るのになあ…」と思いながらも「貴女が世話をするのなら」と許しました。

二日後、小さなダンボールに入って我家に連れてこられ、ダンボールから出てきたのはミニチュアダックスフント、生後1か月の女の子でした。「なんかかわいい…」思わず抱き上げていました。ぴかっと光った真っ黒な毛並、鼻もあまり長くなく、何より目が大きく、その目がくるくるよく廻り、少し白目が出て、それはそれはかわいらしい女の子なのです。私も一遍に気に入ってしまいました。

娘はペットショップでマロンを見つけ、一週間通って、どうしても欲しいと思ったそうです。マロンを見ていてショパンの「小犬のワルツ」を思い出し、そのしぐさに日に日に虜になって行きました。

一方、タローはもう14才の老犬で、大きな体で威厳すら感じる子で、まったく対照的な二匹の犬を飼う事になったのです。

タローは賢い子で、何かしら頼りになる犬でした。お客様からクレームが入ったり、疲れた時に、仕事を終え、ホテルの屋上の階段でタローと並んで座り、会話をし、よく黄昏れたものでした。私が勝手にタローに話し掛け、タローはそれを、目をしょぼしょぼして聞いてくれて、随分癒されました。

タローはリンゴが大好きで、一個そのまま口にくわえて、広い屋上の真ん中に置き、その廻りを何度も何度も喜んで駆け回り、それからリンゴを一口一口食べていくのです。その様子はほほえましく笑顔になれました。ホテルの屋上に我家があり、そこでタローも飼っておりましたので、お客様がまちがって屋上に来られた時は、ワンワン!!と吠え威嚇していました。我家の守衛をしてくれていたのです。マロンを迎える時、タローに対する一種の罪悪感のようなものを感じた事を覚えています。「タローちゃんごめんね。妹が出来たので仲良くしてね。」の思いで毎日接していました。マロンが我が家に来て3か月がたった頃、タローは自分の任務を果たし終わったかの様にして、静かに息を引き取って行きました。

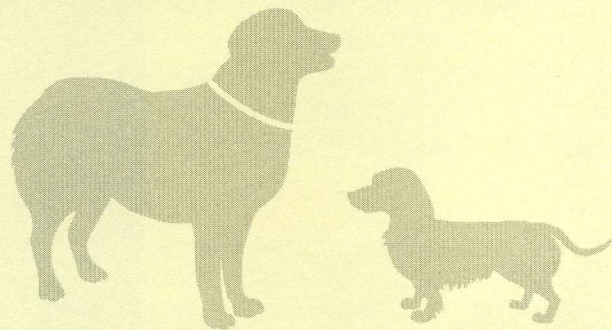
タローがマロンを見る目はやさしく、あたたかいものでした。

タローと過ごした14年間は、同時に主人との思い出が、又、家族四人の思い出が重なります。主人が亡くなった翌年にタローは主人の元に行ったのです。当時を思い出すと、今でも涙が出て参ります。マロンはタローと引替えに我家を照らす光として神様が下さった様にさえ思いました。救われました。以来マロンはすっかり我家に定着し、もう9年目に入ります。

今では私がマロンの世話をする様になっており、それが私の喜びでもあります。毎日娘とマロンの取り合いをしています。動物も人間も一緒です。ただ話せないだけです。家族の一員。本当にそう思います。

タロー、マロン、本当にありがとう!!

たぶん、マロンは自分が人間だと思っているのでは…。そんな風に思います。



編集後記

今期より広報委員になりました。委員会の皆様の段取りの良い準備に大助かりの新米委員です。読みやすく、大阪Ⅱの若々しさでと、初期のゾンシャンによってデザインされた広報誌は、そのスタイルを継承しながら、44号の発刊です。ますます厚くなるクラブの貴重な活動記録、毎号の皆様のご協力に感謝して。 西村 博子